

しゃくとりむしのナン
てっぺんを目指す



しゃくとり虫のナン てっぺんを目指す

作 : fuminchu

画 : KumaCrow



ここは人がたちいない、ふかいふかいもりの中。

このもりにくらす、しゃくとりむしのナンは、やさしくてともだちおもいだけれど、とってもノロマ。



ともだちの、いもむしのテストや、トンボのキナからは、いつもこうどうがおそいと、もんくを
いわれてばかり。

でも3びきともなかがよく、もりのなかにそびえたつ、かみさまがすむという、せいなる木のま
えで、いつもあそんでいました。



せいなる木にすむミノムシのウカは、このもりのちょうろうであり、かみさまのこえがきこえるという、ふしぎなちからをもっていました。



ある日ウカは、もりのじゅうみんたちをあつめ、こういいました。

「みなのもの、けさわたしに、かみさまからのおつげがあった。このせいなる木にのぼり、いちばんさいしょにてっぺんまでたどりついたものに、たからものをさずけるそうじゃ。」



せいなる木へのぼることを、ふだんはゆるされていないもりのじゅうみんたちは、いっぴきにひきと、たからものをめざし、そのたかい木にのぼりはじめました。



しかしふしぎなことに、だれひとり、木のとっぺんまでたどりつくことができず、くびをかしげて、あきらめておりてくるのでした。



「いくらのおぼっても、てっぺんはみえてこない」、「たからものなんてないのでは?」と、くちにするじゅうみんたち。



しかし、ときがたつにつれ、「たからものにはほうせきがちりばめられている」とか、「たからものをさずかれば、えいえんのいのちがやくそくされる」など、うわさにおひれがつき、もりのじゅうみんたちは、いろめきだちます。



そうして、こうきしんにかりたてられた、おおくのもりのじゅうみんたちが、木のてっぺんをめざし、のぼりはじめました。

すうじつご、いつものようにナンは、テストとキナがまつ、せいなる木のまえにおくれていくと、2ひきはなにやら、はなしこんでいます。



「やあ、きょうもおくれてゴメン...」

「なあ、ナン、さっきウカさまにはなしをきいたところ、おりてこられなくなっただいものはいいというし、オレたちもこの木をのぼってみることにしたんだが、おまえはどうする？」

「いや、ぼくはノロマだし、こんなたかい木にのぼれないよ」

「そうね、ナンはノロマだからやめておいたほうがいいわね」

「そうだそうだ、のぼっているうちに日がくれてしまいそうだ」



「うん...そうだね...」

ほんとうは、せいなる木にのぼって見たかったナンでしたが、じぶんにはむりだと、はなからあきらめていました。

テストとキナがのぼったあと、ナンはひとり、せいなる木をみあげていると、ちょうろうのウカがはなしかけてきました。

「ん？ナンよ、そなたは、このせいなる木にのぼらないのか？」

「はい。でも、ほんとうはのぼってみたいのです。ウカさま、ぼくもいつか、せいなる木にのぼれる日がくるのでしょうか？ノロマなぼくは、てっぺんまでのぼることなんてできないのしょうね...」

「ふむ、よいか、どんなゆうしゃでも、とちゅうであきらめれば、ぜったいにてっぺんまでいけないのじゃ。そなたはノロマかもしれないが、さいごまであきらめずにのぼりつづければ、どんなたかい木でも、いつかちょうじょうまでたどりつくとおもわんか？それにノロマなことと、てっぺんをめざすことはかんけないじゃろう」

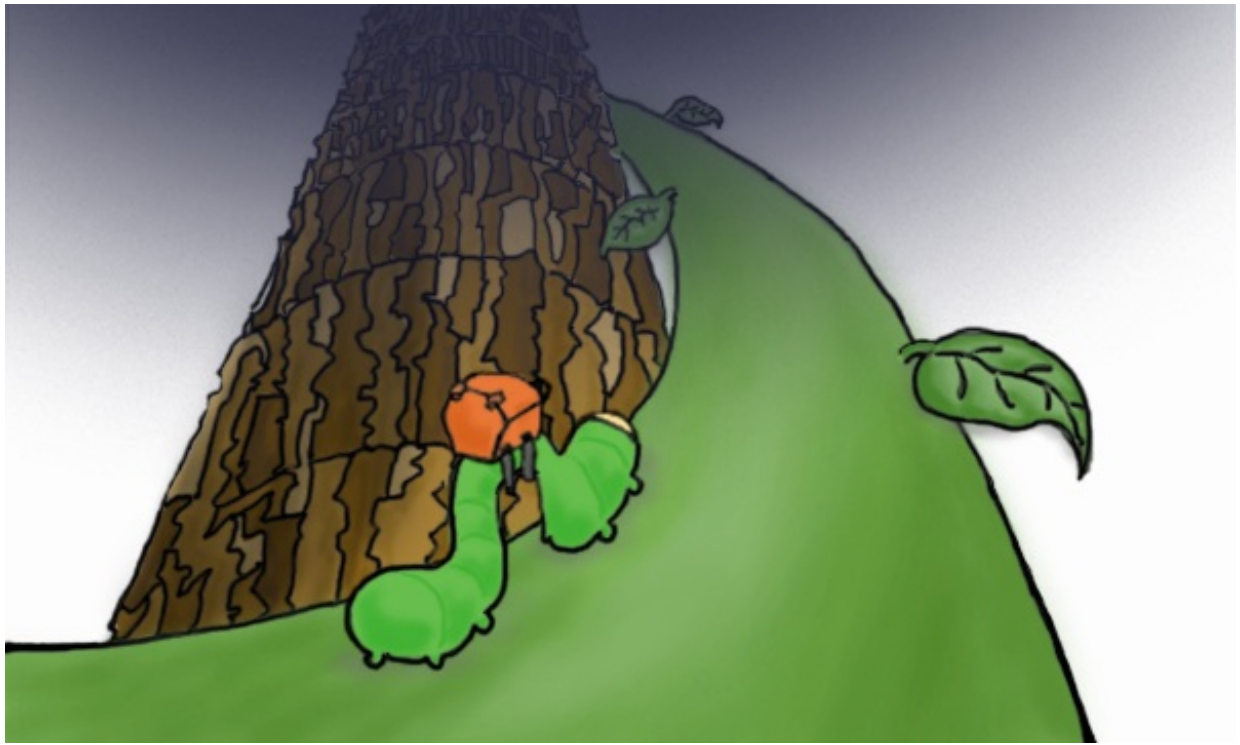


ナンは、じぶんもあきらめずにのぼれば、てっぺんまでいける気がしてきました。

「ウカさま、ぼくものぼってみることにします！」

「フォッフオッフオ、がんばるのじゃぞ」

じゅんびをおえたナンは、せいなる木にむかい、「ぼくだって、あきらめなければ、てっぺんまでいけるんだ！」と、まるでゆうしゃのように、さいしょのいっぽをふみだしました。



のぼりはじめてすぐに、テストがおなかをへらして休んでいました。テストはナンをみつけるとおどろいたように、こう言いました。



「ナン、のぼらないって言ったのに…。おまえはノロマだから、いちばんこの木をのぼれそうもないのに。どうしてきたんだい？」

「ボクがこの木をのぼりきれんかはわからないけど、さいごまであきらめずにのぼれば、きっとてっぺんにまでいけるのさ！ノロマとてっぺんをめざすことはかんけないんだって。」

「てっぺんをめざすって？、そもそもたからものなんて、あるかどうかわからないのに。もういっしょにおりようぜ。」

「いや、ぼくはのぼるってきめたんだ。さきにいつているから。」

おなかがすいたテストにたべものをわけあたえ、じぶんできめたことをほこらしげに、ナンはさらにうえへのぼります。

しばらくのぼっていくと、こんどはトンボのキナが目をまわしながらはなしかけてきました。



「あら、ナン、あなたよくここまでのぼってこられたわね・・・」

「ボクだってこのくらいはできるよ！それに、ノロマとてっぺんをめざすことはかんけいないって、ウカさまがおしえてくれたよ。」

「あなたがてっぺんをめざす？むりよ。それにハネもないのに、とちゅうでおちたらどうするつもり？」

ナンはちょっとだけ下をのぞくと、目もくらむようなたかさにすいこまれそうになります。



「で、でも、ぼくはのぼるってきめたんだ！」

キナのはなしをさえぎり、ちょっとだけふあんだけど、ナンはまたうえをめざしました。

またしばらくのぼっていくと、ねむたそうなふくろうのハナシがかたりかけてきました。



「ファ〜ア、ノロマなナンがこんなところまでのぼっているよ。」

「ボクはノロマかもしれないけど、あきらめなければきっと、この木のちょうじょうまでいけるとおもってる。それに、ノロマとてっぺんをめざすことはかんけいないって、ウカさまがおしえてくれたんだ。」

「きみがてっぺんをめざすのかい？この木がどれだけたかいかしているのかい？そらをとべるボクだって、うえまでいったことないのに。」

ふくろうのハナシですら、いったことがないという木のてっぺんに、はたしてじぶんがいけるのかどうか、とってもふあんになるナン。



「いや、ぼくはきみのいったことがない、てっぺんまでいくってきめたんだ！」

「ファーア、まーがんばれよ。」

あくびをしながら、ハナシはねむりについてしまいました。

「ぼくはほんとうに、この木をのぼりきれののだろうか...」

あしどりのおもくなったナンでしたが、それでもうえへ、うえへと、のぼっていきます。

どれくらいのじかんのぼりつづけてきたでしょうか。あたりはもう、うすぐらくなってきたのに、いっこうに木のてっぺんは見えません。

ナンは、ほんとうにじぶんがてっぺんまでのぼれるのか、くらくなったらどうすればいいのか、とてもふあんになり、上へのぼれなくなってしまいます。



「ちょっとだけやすもう。」

かんがえてみれば、あさからずっとのぼりつづけており、つかれてヘトヘトです。

ナンは木のえだのあいだにからだを入れ、ウトウトしだしました。

すると上のほうからとつぜん、なにやらおそろしいこえがきこえてきました！

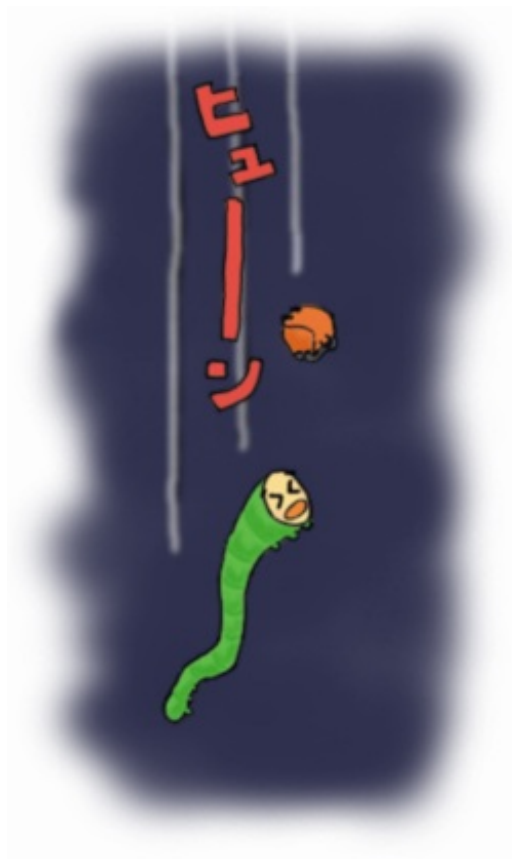
「おい、ナン！ノロマなやつめ！おまえがこの木をのぼれるとおもっているのか？」



あわてて目をあけると、わるいかおをした月のダロが、ナンにはなしかけてきました。

「みのほどしらずめ。おまえみたいなむしが、この木をのぼろうなんてバカげている！オレはこれからすがたをかくす。そうすればおまえは、くらくてのぼることもできずに、とちゅうでおちてしまうだろうな！クッククック。」

ナンは、ダロのことばにおそれおののき、あしをふみはずしてしまいます。



あ————っ！

まさかさまにおちていくナンは、死をかくごしました。

「もうダメだ！」

すると、ポスンッ！というおとともに、からだがおちていくかんかくがなくなります。



「いったいなにがおきたんだ？」

ナンはそーっと目をあけてみると、ともだちのテストとキナが、やさしいえがおでたたずんでいました。

そして、ナンがおちたばしょは、ハナシのせなかでした。





「ファ～ア、きみはノロマで、おちてきたらこまるからと、キナがおねがいしてきたんだ。」

「いいえ、テストがわたしに、ナンはとちゅうで、こわくなってうごけなくなるかもしれないから、いっしょにみにいこうよと、さそってきたからよ。」

「ゴメン、きみのことをノロマとか言ってバカにして……。もうしわけないことをいって、はんせいしているよ。」

ナンはおもいがけない、すけっとたちのしゅつげんにおどろきますが、とっさにさげびます。

「みんなほんとうにありがとう！たすけてくれてすごうれしいよ！」

「ぼくたちナンがここまでがんばるなんて、おもっていなかったんだ。でもきみのがんばってのぼるすがたをみていると、なんだかおうえんしたくなって…。これからぼくたちもきょうりよくするから、この木のてっぺんのたからものをゲットしてきてくれよ！」

「みんな、ありがとう！」



そのやりとりを、ニヤニヤしつつ、うなづきながらみていた月のダロは、わかればいいのだとばかりにすがたをあらわし、よるのせかいをあかるくてらしました。

「ぼくがとべるところまでうえに行くから」と、ハナシはナンたちをせなかにのせて、よぞらにとびたちます。



せいなる木は、上にいくほどけわしくなってきました。

「ぼくたちは、こんなところをのぼっていたんだね…」

そして、しばらくのぼりつづけたハナシは、つかれてとべなくなります。



「ぼくにできるのはここまで。あとはきみたちだけでのぼっていくんだ」

「ハナシ、ここまではこんでくれてありがとう！ぼくたちががんばるよ！」

「さー、つぎはわたしのばんね！」



ナンとテストを持ち上げたキナは、またよぞらにとびたちます。

くもがすぐちかくにあり、たかさにおどろきながら、ナンたちはてっぺんをめざし、のぼりつづけます。

どれくらいのぼったか、キナはとぶのにつかれてしまい、うごけなくなってしまう。



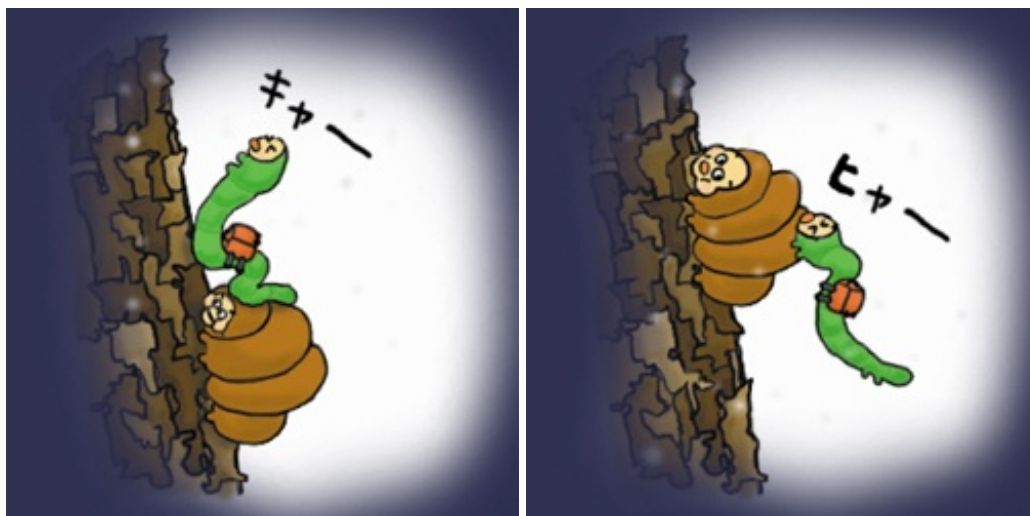
「ゴメン、わたしができるのはここまでよ。テスト、ナンをうえまでつれて行ってあげて！」

「まかすとけて！」

「キナ、ここまでほんとうにありがとう。ぼくぜったいにてっぺんにのぼってみせるよ。」

つかれてこえもでないキナにかんしゃしながら、ナンとテストはてっぺんをめざします。

そのご、ナンとテストは、おたがいをささえ、はげましあいながら、木のみきをのぼりつづけました。



たかさにおびえるナンを、テストはしたからささえたり、おちそうになるナンはテストにひっしでつかまったり、あしをすべらせたテストはナンをつぶしたりしながらも、のぼりつづけていきます。



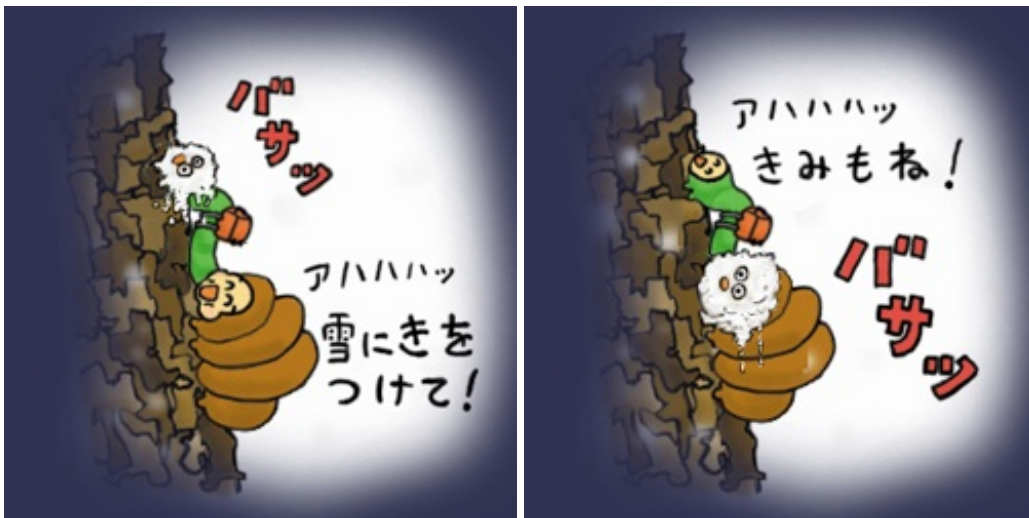
とちゅう、おなかがすいたテストのはらのむしは、どんどんなりひびき、ついにテストはうごけなくなってしまいます。



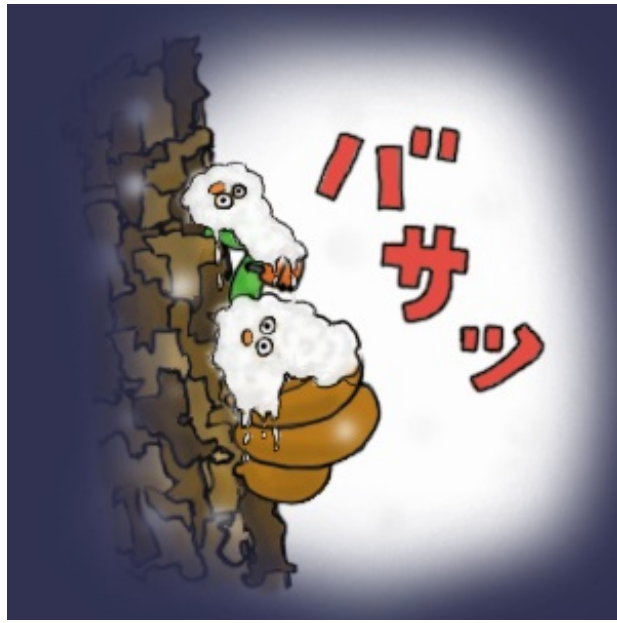
ナンとテストはひとやすみをして、このさきのけわしいみちのりにそなえます。
きっとじぶんだけだったらもうあきらめておりているだろうなと、ナンはおもいました。



あきらめずにのぼるナンとテストは、木のみきからおちてくる、ゆきをよけながら、ひたすらてっぺんをめざします。



けわしいみちのりなのに、にひきとも、なんだかたのしそうですね。



だいぶそらがあかるくなってきたころ、とつぜん目のまえがパッとあかるくひらけます。



「ねえ、ここ、ひょっとして？」

「うん。ひょっとして…かな？」

「やったー！てっぺんまできたんだ！ぼくたちついでにてっぺんまできたんだよ！」



ニひきはてっぺんについたことをよろこび、「たからもの」のことなどわすれてしまいました。

ナンとテストは、おたがいをたたえあっていると、ひがしのかなたからお日さまがのぼってきました。



お日さまはナンとテストに、こうかたりかけました。

「あなたたちはみごとに、このたかい木をのぼってきました。あなたたちのうち、だれかがきょうりよくすることをあきらめていたら、ここまでくることはできなかったでしょう。あなたたちが手にいれた、たからものがなにかわかりますか？」

ナンとテストにはそれがなんとなくわかっていました。

「そうです、とつてもきちょうなたからもの。それは……」

あいてをおもいやるこころ
です!





おしまい



しゃくとり虫のナン てっぺんを目指す 2010年9月初版発行

fuminchu作 KumaCrow画

この本に対する感想などありましたら、i.fuminchu@gmail.comまでお送りください。

また、<http://twitter.com/fuminchu01>でも感想を受け付けております。